



# 小倉千加子

(評論家)

## 保育の現場は、女性と女性との戦いです

エッセイ集『草むらにハイヒール』

昭和のアイドルを論じてベ  
ストセラーとなった『松田聖  
子論』から三十年余。フェミ  
ニズム論壇の立役者は今、家  
業を継ぎ、大阪で認定こども  
園を運営している。

「両親は幼稚園を三つくらい  
やっています。今世紀に入  
り、働くお母さんが増えてき  
て、〇歳児から預かって欲し  
い、というニーズが高まり、父  
親が保育園もつくりました。  
高齢の親たちが心配なことも  
あり、教えていた大学を辞め、  
実家に戻っていた私は当時五  
十代。仕事をしないのも嫌な  
ので、最初、その保育園を手伝  
っていました。でも、保育園  
は、教育が出来ないので、ち  
よっと物足りなかったんです  
(笑)。「私やっぱり、幼稚園  
がいいなあ」とボヤいたら、  
父が「じゃあ、つくるか」と  
言った(笑)。一階が〇・一  
・二歳の保育園、二階が三・

四・五歳の幼稚園、定員二三  
〇名の大規模(認定こども園)  
の誕生です。平成二十三年創  
立で、九年経ちました」

七年ぶりの著書『草むらに  
ハイヒール』(いそっぷ社)は平  
成二十年から二十六年にかけ  
ての週刊誌連載を編んだもの  
で、小倉さんが保育士の資格  
を取り園長になった時期に執  
筆された文章だ。人物論が中  
心であり、女優、力士、政治家  
と対象は多岐に渡るが、中島  
梓さんや佐野洋子さんなど、  
同時代を生きて逝った人々へ  
の優れた追悼文集とも読める。  
「中島さんは早稲田で一学年  
違いでしたが、向こうは文学  
部で私は教育学部、直接の交  
流はありませんでした。臍臓  
がんで亡くなってから絶筆  
『転移』を読み、吃驚したんで  
す。専業主婦だったお母さん  
との間に、凄まじい葛藤のあ  
った人だった。それから夢中



おぐらちかこ/1952年、大阪府生まれ。早稲  
田大学大学院文学研究科心理学専攻博士課程  
修了。『ザ・フェミニズム』(上野千鶴子との  
共著)、『赤毛のアン』の秘密』など著書多数。

で彼女の評論を読みました。  
佐野さんとは麻雀の時に呼ば  
れる仲でしたが、おしゃべり  
に毒があつて本当に面白い  
の。でも今回エッセイを読み  
返してみても、佐野さんが人生  
で一番必死だったのは、息子  
さんの保育園の四時のお迎え  
に遅れないよう走っていた時  
期だったと仰っていて、驚き  
ました。昔の保育園のお迎え  
はこんなに早かったんだ、と」

本書の後半は、国の打ち出  
す「子育て支援」のあり方に疑  
問を呈する内容が俄然増える。  
「こども園を始めたら大変  
で、愚痴をこぼしたくなつた  
んです(笑)。日本の子育て  
支援は働く女性の子育てを社  
会が肩代わりしましょう、と  
いうもので、うちも夜七時ま  
で預かりますが、こんな長時  
間保育を許している国は他に  
ありませんよ。毎晩お迎えに  
遅れるお母さんがいて、保育  
士がどうとう、わたしにも子  
供がいます」と抗議した。現  
場では女と女の戦いです。ま  
た、専業主婦への風当たりの  
強い昨今ですが、保育者の立  
場から見れば、彼女たちは、  
社会の支援に頼らずに自分の  
手で自分の子供を育てる「自  
立した」存在とも言えます」

こども園を運営するフェミ  
ニストの論客。その知見が盛  
り込まれた次作も待たれる。  
「すっかりこども園事務長の  
アタマになってしまいました  
が(笑)、今、園長は人にお願  
いしていますし、給与計算な  
ど人に任せられるところは任  
せるようにして、そろそろ評  
論活動を再開したいですね」